第八章 精力と勇氣

勇氣ある人には出來ざることなし。

ジヤツクエス・クール

世界は勇者に屬す。

獨逸の諺

凡て——行ひ始めし工(わざ)は悉く心を盡くして行ひて之を成し遂げたり。

舊約聖書歷代史略下三十一章廿一節

精力はチユートン人種の特質なり

古代の一北人(ノースマン)(譯者註、古のチユートン人を云ふ)の記せし有名なる語あり、此語まことに能くチユートン人の性格をあらはせり。曰く『余は偶像をも信ぜず、鬼神をも信ぜず、唯余自身の身體と精神の力をのみ信用す』と。昔の鶴嘴(つるはし)の飾に『余自ら道を發見するか、若くは道を造らん』との格言を記せるものあり。是れ今に至るまで北人の子孫を卓越せしむる堅固なる獨立をあらはすものなり。げにやスカンヂナボアの神話に於て、そが鎚を持てる神を有する

ほど著しきものはなし。人の性格は小事に於て現はる、人の鎚を揮る有樣を見ても、此人の精力如何を或程度までは知ることを得べし。有名なる一佛蘭西人、友人と某地に在りし時、其友土地を買はんことを望みたるに、彼は一言を以て此地の住民の特性を看破せり。曰く『此處にて買ふことは注意し給へ、余は此地方の人々を知る、此處より巴里の獸醫學校に來り居る學生は、鐵砧(かなしき)を力強く打たず、以て彼等の精力の乏しきを知る、御身此處に資本を投ずとも充分の利を得ざるべし』と。是れいみじくも又正しくも人格の價を評したるもの、此人の思慮深き觀察者なることを示し、且又各人の精力こそ實に國家に力を與へ、其耕耘する土地に價値を附するものなることを表はせり。佛蘭西の諺にこれあり『其れが價値あるだけに之も價値あり』と。

人格の力の基礎

精力の修養は最も重要なり。蓋し善望を追求する時の確たる決心は、正大なる品性の基となるものなり。精力は人をして面白からぬ俗務や、乾燥無味なる細事を意とせずして進ましめ、如何なる境遇に於ても人を前進せしめ、向上せしむ精力は天才よりも功を奏すること大にして、失望や危險の虞な

目的の力

し、何事に拘はらず、成功を獲得するに要するものは卓越せる才幹よりも寧ろ確固たる目的なり。——力量のみにあらずして、精力強く堅忍耐久して勞作せんとする意志なり。故に意志の精力は、人間人格の眞中心と稱すべし。——一言にして蔽へば、意志の精力即ち人自身なりと謂ふべし。そは人の各行動に刺戟を與へ、各努力に精神を與ふ。眞正なる希望は此上に建てらる、而して人生に眞の芳味を與ふるものは希望なり。バットル・アベーに於ける破れたる兜(かぶと)の上に美しき標語あり、曰く『希望は我力なり』と。是れ各人生涯の標語となり得べし。

集中

シラフの子は言ひぬ『心銷沈せるものは禍なるかな』と。牢乎たる心を有するほど大なる天福はなし。人其努力せし所失敗に歸するとも、我最上(ベスト)を爲したりとの自覺あらば、滿足する所あらん。一人あり、此もの忍耐によりて患難と戰ひ、誠直に於て勝を占め、其足傷き其脚立つこと能はずして尚ほ且敢然として勇進すとせよ、人を勵まし人に美なりと感ぜしむること、何かは之に及ぶべしや。

勇敢なる勞作

希願欲求を有するとも、之を速に實行に移さずしては、唯心神を害するの

結果に及ばんのみ。多くの人は『ブリュッヘルの來るまで』とて徒らに待つを常とす。(譯者註、ブリュッヘルはプロシアの將軍なり、有名なるウォーターローの戰に、ウェリントンの援軍として來る、故にかく云ふ)されど唯待つことは何の利かあらん、宜しくウェリントンの如く、待たずして速に奮進し、堅忍なるべきなり。一たび善望を定めなば、敏捷に、迷はずして之を遂行すべし。多くの場合に於て、辛苦勞役は最上最健の鍛錬として快活に之を堪へ忍ぶべきなり。

ヒュー・ミラー及びフォーエル・バックストンの語

アライ・シェッフェル(譯者註、前出)の言に曰く『人生に於て心及び體の勞働なくしては、一事の果を結ぶなし。努力し、尚ほ努力す、――是れぞ實に人生なる。此點に於て我が生涯は充足せりき。余は敢て言はん、何物も我勇氣を挫きしことなしと。强健なる精神と高潔なる目的とを以てせは、(道德的に言ひて)人は其欲する所をなし得』と。

『適當なる敎育を受けし學校は唯一あり。是れ世界大の學校にして、此學校にては辛勞と困苦とが、嚴格にして而も高潔なる敎師なりき』と。是れまことにヒュー・ミラー(譯者註、前出)の言なり。其精勵の挫くるに任せ、又は薄弱なる

意志の力及び意志の自由

口實の下に其勞作を避くるが如き人は、終に失敗せんこと疑ひなし。何事を爲すにも避くべからざる事と思ひて之を爲せ。然れば速に敏捷快活に之を爲すを得るに至るべし。瑞典のチャーレス九世は、意志の力を信ずること堅き人、年若くして既に然りき。其末子が難事に當り居る時、彼は手を末子の頭に置きて叫ぶらく『彼はそをなすべし。』『彼はそをなすべし』と。專心の習慣は時經ればいと容易くなること、他の習慣と異なるなし。故に比較的凡庸の人と雖も、其力を一時一事に集中して、堅忍不撓なれば以て大を成すを得べし。フォーエル・バックストン(譯者註、十九世紀英の慈善家なり)は、普通の手段にても非常なる專心を以て大事を成すに足るを信ぜし人、『汝の手が爲すべく見出せしことを、何事にても汝の全力を以て爲せ』との聖書の敎訓を實行し、其成功は『一時一事に全力を用ふること』の實踐に依りて得たるものとせり。

眞の價値ある事は、勇往勞作せずして焉ぞ之を獲るを得ん。人の進步向上するは、主として意志の活動的努力に依り、患難と遭逢して奮激邁進するこ

とに由る。而して此の如き方法を用ふるとき、一見實現し難く見ゆる結果を獲得することの多きは寔に驚くの外なし。強き豫想は「可能(ポッシビリチー)」を變じて「實在(リアリチー)」となす。蓋し我等の欲求は、屢々我等が爲し得べきことの前驅者たるなり。之に反して、怯懦逡巡の徒は、何事をも不可能のことと感ず、而も其理由唯不可能と見ゆと云ふのみ。傳へて曰く、佛蘭西の一青年士官「余は佛蘭西の元帥とならんと志す、大將軍とならんと志す」と言ひつゝ其部屋を歩むを常とせりと。まことに彼の欲求は彼が成功の豫兆なりき。此青年士官は終に有名なる指揮官となり、佛蘭西の元帥となれり。

『オリヂナル』の著者オーカー氏が、意志の力を信ずることの篤きや、或時病みて、健康とならんと決心すと言ひしに、忽ち健康となりし程なり。かゝる方法も一度は功あらん、然れども、これは種々の處方よりは安全ならんも、常に成功すると限らず、肉體の上に及ぼす精神の力は、まことに大なり。然れども精力を過度に働かすときは、遂に身體を破るに至らん。ムーア人(譯者註、亞弗利加北方の黒人の稱)の首領ムレー・モラック、不治の難症に罹りて瀕死の病

床に横はれる時、其麾下の軍と葡萄牙人との間に戰爭起りぬ。此戰一大危機に瀕するや、彼れ床より起き上り、其兵を集め、之を指揮して遂に勝利を得、而して後直ちに倒れて息絕えたりと云ふ。

人一事を爲し一業を企てんと志せし時、之をして成功せしむるものは即ち意志なり、目的の力なり。一聖者常に言うて曰く『御身は御身の志すものになるを得、吾人の意志神明と相結ぶや、其力甚だ大にして、眞面目に眞正なる希求を以て志すことは、何事にても成就するなり。其欲する所の者にならずして、焉ぞ謙讓、忍耐、謙虚、寛仁なることを熱心欲するを得んや』と。傳へて曰く、一大工自ら修復し居る高官の椅子を殊に心を用ひて平滑になし居りしに、人あり之を見て其故を問ふ。乃ち答へて曰く『是れ余が他日此椅子にかゝらん時、かけ宜からんためなり』と。誠に不思議にも、後遂に此大工は此椅子に坐する人となりしと云ふ。

意志の自由に關して理論家が如何なる理論的結論をなすにもせよ(譯者註、意志自由なるか然らざるかの問題は、哲學上倫理學上煩瑣なる議論のあ

る所なり。吾人は皆實際上善惡を選ぶの自由あることを感ず。己は水上に投げられたる藁の、單に水流の方向を示すが如きものにあらずして、內に强健なる水泳者の力を有し、自ら驀進し、波と戰ひ、己自身の獨立の行路を拓き行くを得るを感ず。我等の情意を絕對的に拘束するものはなし。吾人は我行動が恰も魔術に依りての如く拘束せらるゝとは信ぜず。若し拘束ありと考へなば、世に卓越せんとの希望も銷沈せん。家庭の法則をも社會の配備をも、公共の成體(インスチチューション)をも併せて、凡そ人生の全事業全行動は、意志自由なりとの實際上の確信の上に進むものなり。之なくしては何處に責任の所在を求めん。之なくしては敎育、忠言、說敎、批難、矯正等の利何處にかあらん。人が法律に從ふか如何は人の自ら定むる所なり。此事が人類一般に通ずる事實なるが如く、人類一般の信ずる所ならずば、法律の用は抑も何ぞや。吾人が生涯の各時に於て、良心は常に言を揭げて曰く『意志は自由なり』と。吾人の意志は全く吾人のものなり。吾人が之を善き方向に進むるも惡き方向に進むるも、そは全く吾人各自の如何に由れり。吾人の習慣や吾人の誘惑が吾人を支配する主人

にあらず。吾等が習慣や誘惑の主人として之を制馭すべきなり。(譯者註、物欲に支配せられず、自ら支配すべきなりの意)習慣、誘惑に打負くる時に於てすら、良心は吾人に誘惑に抵抗すべきを勸め、若し物欲を制馭せんと決心せば、我有する力だけにて充分なることを告ぐ。

ラメネー(譯者註、十九世紀佛の著述家)快活なる一靑年に告げしことあり、曰く『今御身は丁年なり。丁年と云へば、既に自ら決する所あるべき年なり。最少し後になれば、御身は自ら掘りし墳墓の中に呻吟して蓋石を取り除くの力もなからん。最も容易きものが吾人の中に習慣となりたるを意志と云ふなり。されば强く確と意志するを學べ、斯くして御身の浮遊せる生活を固定し、決して彼方此方に漂はしむる勿れ。枯れし木の葉の吹く風每に漂ふが如くなる勿れ』と。

靑年にして堅き決心を定めて之に執着せば、其好む所のものになるを得べしと、是れバックストン(譯者註、前出、又後に委し、英の慈善家)の確信なりき。其子息の一人に書を贈りて曰く『御身は既に右か左か何れにか轉ずべき年

齡にあり。今は御身、主義、決意及び心の力の效力ある所以を證明するか、然らざれば怠惰に陷りて亂雜無能なる青年の習慣性格を得ざるべからず。御身若し此の如き有様に陷らば、再び上り來ることの易からざるを見るべし。青年は其欲するものになり得ること、余の確信する所なり。余は全くその如くなりき。　余が幸福繁盛の大部は、余が御身の年になしたる轉變に由る。御身まことに眞面目に强精勤勉ならんと決心せば、御身は一生の間、此決心に從ひて行動するを得との確信の上に立て』と。方向を拔きて考ふるときは、意志とは單に不屈不拔堅忍のことなり。されば萬事の成功は其方向と動機の正しきとに依ること明ならん。肉感の快樂にのみ向はゞ、强固なる意志も只惡魔たるのみ。而して智力は唯此惡魔の卑しき奴隷たるのみ。之に反して、善に向はゞ强固なる意志は王たり、智力は人間最大の福祉を司るものとなる。

『意志の在る所には道あり』(譯者註、有名の格言なり、精神一到何事不成に當る)とは、陳腐にして而も眞實なる語なり。人一たび一事を成さんと決心せば、此決心だけにて屢々障碍を超え、成功を確實にす。出來ると思ひしことは、

出來ること殆ど疑ひなし。——成功せんと決意するは、誠に屢々成功其者なり。かくて熱烈火の如き決心は、其周圍に「全能」と云ふ香氣を有するが如く見ゆること屢々なり。

スワロウ

スワロウが人格の强固なるは、其意志する力の盛なるに由れり。彼また決意强き人の常として、之を一の說として常に說きたり。失敗せし人に、彼はかく言ふを常とせり。曰く『御身は半ば意志したるなり』と。リシエリユー(譯者註、十七世紀、佛の政治家)及びナポレオンの如く、彼は「不可能(インポッシブル)」と云ふ字を辭典より取り除くを得たりしなり。『余は知らず。』『余は能はず。』及び『不可能』と云ふ語は、彼が何よりも第一に嫌ひし所なり。『學べ』『爲せ』『試みよ』是れ常に彼の叫びし所なり。スワロー傳の著書曰く『スワローは、誰人にもこれある能力を撓まず倦まず訓練し發達せしめば、其爲す所甚だ大なりとのことを著しく例證するものなり』と。

ナポレオンと「光榮」

『最も眞實なる知慧は、決意決心なり』と、是れナポレオンの愛せし格言の一なり。彼の生涯は誰人にも勝りて、强くして撓けざる意志の大を成すことを、いとも明かに證明するものなり。彼は其全心全力を其事業の上に向けたり。

心も力も弱き國王國民等は、相續いて大ナポレオンの前に斃れぬ。アルプス山進軍の前途にありと語られし時、彼は言ひぬ『余は一のアルプスをもあらざらしむべし』と。かくてシムプロン(譯者註、アルプス山中の一峰)を越ゆる一路、今までは通り難しとせられたる地方を通じて造られぬ。彼は言ひぬ『不可能とは愚人の辭書にのみある語なり』と。彼は恐ろしきほど働きたる人なり。屢々四人の秘書官を一度に用ひて之を全く疲勞せしめたり。彼は人をも自身をも假借することなかりき。彼の感化力は、他を勵まし他に新しき活力を與へたり。彼は言ひぬ『余は泥より我部下の將軍等を造りたり』と。彼のナポレオンや、右の如き多數の長所を有したりと雖も、是等の長所は、畢竟するに何の利益をもなさゞりき。何となれば彼の强き私利心は、其破滅の原となり、又佛蘭西の破滅の源となり、彼の爲めに佛蘭西は、後國內亂れて無政府の狀態に陷るに至れり。力は如何に根氣强く之を用ふるとも、仁慈の之に交はるなければ、其所有主をも其從屬者をもあやまるものなり。又知識にして善を交へずは、只正に惡魔の權化に過ぎず。是れ實にナポレオンの生涯の敎ふる敎訓なり。

ウエリントンと「職分」

我英國のウェリントンはナポレオンより遙に偉大なる人なり。決心鞏固にして不屈不撓なることナポレオンに劣らず、而して我利を求めず、我良心の命を重んじ、眞正の愛國心を有することは遙に之に勝れり。ナポレオンの目的は「光榮(グローリー)」なりき、ウェリントンの標語はネルソンと等しくデューチー「職分」なりき。「光榮」なる語はウェリントンの書簡中に一度もありしことなし。「職分」の字は屢々あれども、誇大の語の之に伴ふことはなしと云ふ。まことに大なる困難に際するも、ウェリントンは慌てふためき、或は臆病となること無かりき。困難障碍の益々增大するや、彼の精力も之に從ひて益々增大す。彼が半島戰爭の大紛亂大困難の間に持ち續けし忍耐、鞏固、決意は、恐らくは有史以來最も崇高のものならん。西班牙に於てウェリントンは將帥としての天才を示せしのみならず、政治家の十大なる智慧をも顯はしたり。彼の天性は事の激しきに當りては怒り易きものなりしが、其「職分」てふ高き觀念は、彼をして之を制するを得しめたり。されば周圍のものは、ウェリントンの忍耐の其極

動作の敏速

を知らざるに驚けり。彼の偉大なる品性は、功名心、貪欲、劣情のために汚されずして立ちき。個性の强き人なりしも、亦多才多能の人なりき。將帥としてはナポレオンと匹敵すべく、敏捷强健、大膽なること、クライヴ(譯者註、英國人にして印度を征定せし有名の將軍)の如く、政治家としては賢明なることはクロムウエルの如く、心清く思ひ高きことはワシントンの如くなりき。偉大なるウエリントンは、死後に不朽の名聲を殘したり。此名聲は熟練せる組織力と不屈なる剛毅と高潔なる勇氣と、尙更に高潔なる忍耐とに依りて千辛萬苦して戰爭に勝ちたるに據れり。

精力は常に敏捷と決斷との中にあらはる。旅行家レッドャードは、亞非利加協會より何時亞非利加に出立の用意整ふかと問はれし時、直ちに答へて曰く『明朝』と。ブリュッヘル(譯者註、前出、普の將軍)は敏捷なりしためプロシアの軍隊中、之を「前進元帥(マーシャル、フオアード)」と綽號(あだな)せり。後にセント・ギンセントの伯爵となりしヂョン・ジェルギスは、何時乘船の準備整ふかと問はれし時、「直ちに」と答へたり。サー・コリン・カムベルが印度軍の總督に任ぜられし時、何時出發するを得

印度にて英人のあらはせし精力

ワーレン・ヘスチングス

べきかと問はれしに、答へて「明日」と言へり。――かくの如きは、カムベルが後の成功の前兆とや謂はん。蓋し戰に勝利を得る所以のものは、敵の失錯の機を直ちに利用するが如き速斷と敏捷となり。ナポレオンは言ひぬ『アルコラに於て余は廿五人の騎兵を以て勝を占めたり。余は兵士倦怠の色あるを見て、此時こそとて各人に喇叭を與へて進ましめ、此少人數を以て戰に勝ちたり。敵と我とは互に他を威嚇せんと努むるものゝ、若し我に恐懼の色動かば、直に此時を利用して禍を福に轉ずべきなり』と。彼他の時また言ひしことあり『失ひたる時間は、不幸の起る機會を造る』と。而して其墺地利に勝ちたるは、墺地利人が時間の價値を知らざるに依るものにして、彼等が時間を無益に費し居るとき、之を敗りたるなりと言へり。

印度は十八世紀の間、英人が其精力をあらはせし舞臺なりき。クライヴよりハーヱロック・クライドに至るまで、印度の政治軍事に名を著はせし英人相續いて起れり。――ウエレスレー・メットカーフ、オートラム、エドワーヅ、及びローレンス家の如き皆是なり。此外瑕瑾多かりしも偉大なりしワーレン・

ヘスチングスあり、不屈の意志を有し、不撓の勤勉をなせし人なり。ヘスチングスの家は、由來舊家にして名高きもの、而も運命の波に飜弄せられ、其スチュアート王家に忠義を盡せしことの、却て禍となりて、遂に衰微し、數百年治め來りしデーレスフォードの家族領地も、人手に渡ることゝなりぬ。デーレスフォードを治めし最後のヘスチングスは、其第二子を此處の寺領に住ましめたり。多年の後、ワーレン・ヘスチングスは、實に此人の子として此家に生れたるなり、

幼きヘスチングスは、村校にて農人の子と等しき椅子に坐して文字を學びぬ。彼は其祖先の領有したりし野にて遊びぬ。忠義勇敢なりし、デーレスフォードのヘスチングスがありし昔の有樣は、常に幼心に想ひ出づる所なりき。若き功名心は火と燃えぬ。傳へて曰く、或夏の一日、彼年七歳なりしが、此土地を流るゝ小川の堤に身を横へて、ふと此土地を恢復せんとの決心を起しきと。そはまことに少年の小説的夢想なりき。されど彼は之を實現せん・と生きぬ。夢は熱情となり、彼の生命の中に根を据ゑぬ、而して成年に及ぶまで彼

は此決心を追ひぬ。之を爲すや、彼が性格の著しき特質なる冷靜不撓の意志を以てしぬ。孤兒(譯者註、ヘスチングスは孤兒なりき)は、當時の最有力者の一人となりぬ。彼は其財產を恢復し、舊領地を買ひ戻し、再びヘスチングス家の邸を造りぬ。マコーレー(譯者註、十九世紀英國有名の文士且史家)の文に曰く『熱帶の太陽の下に、在りて、五千萬の亞細亞人を治め居りし時、(譯者註、ヘスチングスが印度總督たりし時を云ふ)彼の希望は軍事、財政、立法等に關する劇務の間にも、常にデーレスフォードに向ひたりき。而して善惡褒貶の不思議に相交はれる其長き公生涯が、遂にとこしへに終りしとき、其死せんとして退きし處は、實にデーレスフォードなりき』と。

サー・チャーレス・ナピアー

サー・チャールス・ナピアーも、亦印度總督として非凡の勇氣と決斷との人なり。彼某處の戰に於て困難に陷りしことを語りて曰く『此困難は唯余の足を益々深く地中に入らしむるのみ』と。彼のミーアニーに於ける戰は、史上最も大なる事功の一なり。二千人を以て而も其中歐洲人は唯四百人のみなるに、彼は三萬五千の堅固にして武裝いかめしき敵の一軍を打ち敗りしなり。

此事や一見誠に暴虎馮河の勇の如し。されどもナピアー將軍は、自身を信じ、又其部下を信ぜり。彼は高き堤防(其前に城壁あり)の中心にある敵軍を攻撃して三時間激戰したり。彼が率ゐる小軍隊の各將卒は、彼に激勵せられて、一時は皆英雄の如くなりぬ。敵は二十人を以て我の一人に當るにも拘はらず、追ひまくられて退きぬ。されど其顏を我に面して退きたるなり。軍人の戰に於てまた人生百般の戰に於て勝を占むるものは、かくの如き勇氣と固執と動かざる堅忍との力に依れり。一足身を進むれば競走に勝つべく、更に一前進すれば野戰に勝つべく、五分間更に忍耐して勇氣を出せば戰爭に勝つを得べし。たとひ汝の力他より少くとも、之を續け之を集中せば、敵手と等しきを得、又之に勝つことを得。スパルタ(譯者註、古希臘の一國にして武を尙ぶ)の父が、其子劍の短きを訴へたるに答へて『さらば一足進むべし』と言ひたるは、人生の萬事に適用せらるべきことなり。

ナピアーは自身の勇敢なる精神を以て部下を激勵するの方法を取れり。彼は兵卒の如く辛き働をなしぬ。彼は言ひぬ『指揮の最良術は一の仕事に於

其印度劍士に對する冒險

て充分我分を盡すにあり。一軍を指揮するの人は、全心を其事に向けずんば成功することなし。困難增さば勤勞從ひて增さざるべからず、危險增さば勇氣從ひて增し、以て總ての障碍を破らざるべからず』と。カッチェー丘陵の戰に於てナピアーに隨ひし青年士官言ひしことあり『かの老人(譯者註、ナピアーのこと)が絕えず馬上にあるを見るとき、我等年若く强健なるもの爭で怠慢なるを得ん。若し彼の命なりせば、余は裝塡せられたる大砲の口にも往かん』と。此言ナピアーの聞く所となるや、彼は是れまことに我辛勞に對する充分の報酬なりと言へり。

ナピアーが印度の一手品師と會見せし話は、著しくナピアーの沈勇と稀れなる率直と誠直なる品性とを表はせり。印度に於ける戰爭の後、或時有名なる手品師、軍營を訪づれてナピアー、其家族及び司令部武官の前にて其術を演ぜり。種々の術ありし中にも、彼は其助手の手にある白レモン(譯者註、小さき橙の如き實)又はレモンを、劍の一撃を以て二つに斷てり。ナピアー思へらく、手品師と助手との間には豫め密約のあるありて然るならんと。人の手にある小さ

き品物を劍の一擊を以て割り、肉を斷つことなしと云ふが如きは、不可能の事と彼は信ぜり。スコット(譯者註、英國十九世紀の文學者)の小說タリスマンに、同一の記事を揭ぐとはいへ、此密約の有無如何を確めんと、ナピアーは自己の手にて試みんことを申出し、其右手を差し出したり。手品師は其手を熟視して試驗をなす能はざる由を答ふ。ナピアー乃ち叫んで曰く『汝の虛僞なること今ぞ解れり』と。手品師は曰ひぬ『暫し待ち給へ、願はくは御身左手を示し給へ』と。ナピアーは左手を出しぬ。手品師は確と言ひぬ『御身若し其手を確と保ちて動かし給はずは、余はかの術を試み申さむ』と。ナピアー問ふ『さりながら、何故に右手は惡しきか』と。『さればに候、右手は中央が凹み居れば、拇指を斷ち切らん恐れあり、左手は中央高し、されば危險は少なからん。』ナピアーは驚きぬ。後當時のことを語りて曰く『余は喫驚しぬ。余は今やそが巧妙なる劍士の詐ならぬ手業なるを知りぬ。余若し我部下の面前にて手品師を罵ることなく、又其虛僞如何を試驗するなど申出でざりしならば、余は確かにかかる危險より身を退けしならん。兎に角余は手にレモンの實を載せ、眞直に

腕をつき出したり。手品師は呼吸をはかり、やがて劍光一閃、レモンを二つに割りぬ。余は掌上に劍の刃の觸るゝを感じぬ、恰も冷き糸を掌上に曳きたるが如く感じぬ。吾等の勇しき者共がミーアニーに打ち敗りたる勇敢なる印度劍士については、これだけ言はゞ十分ならん』と。

　印度に於ける近時の恐ろしき戰に於て、英國々民の特質なる强健、剛毅と自己依賴との顯はれしこと、今日までの英國の歷史に於て第一なり。英國の施政者が、不明にして非常なる過ちに陷りしこと屢々なりと雖も、國人は、殆ど崇高に近き勇氣を以て、自ら自己の道を開拓し行かんと計ること一般なり。千八百五十七年五月、突如として雷鳴の如く叛亂の印度に起りし時は英國の軍隊は人員の極度まで減ずるを許され居りし際にて、且諸處に散り居り、多くは遠き軍營にありたりき。ベンゴールの各聯隊の兵は、漸次士官の命に背きて脫出し、デルヒに逃れたり。到る處英國軍隊は小枝隊にて危難に瀕し、攻擊せられ、圍繞せられ、叛亂に抵抗すること能はず見えたり。英兵の挫敗は此上なき有樣にて、印度に於ける英の破滅はいとも確實に見えぬ。さ

れば『是等の英人は其何時敗らるゝかを知らず』と其古いはれし語の今も適用せらるゝなり。されば此時此場所英人の最後の運命に立つに至ることそ誠に理の當然なりしなれ。

叛亂の結果、猶ほ確かならずして、印度土人の王の一人ホルカーが占星者の意見を問ひたることあり。此者の答はかくなりき『印度の歐洲人皆殺されて唯一人のみ殘るとするも、此一人は戰ひて再び勝を得んとすべし』と。英人の最困難なりし時に於ても――此時もラックナウに於ける如く、英國の軍人、官吏、婦女は極少の數にてありながら、市に於て郡に於て武器を以て士兵に對抗せり。――毫も失望するものなく、一人も降參を思ふ者なかりき。幾月もの間、他處にある同國人との交通を斷たれ、英國が既に印度を失ひしか、尚ほ之を保てるかを知らざりしも、彼等は其國人の勇武と、熱誠とを確信することを止めざりき。彼等は信ぜり、印度に於ける英人が一團に集まる時ともならば、彼等の死するまゝに投げやらるゝことなしと。彼等は其逆運の恢復と最後の勝利との外、他の結果を夢にだに想はざりき。若し惡に繼ぐに益々惡

を以てせば、彼等は唯其位地に於て斃れんのみ、其職分に死せんのみと。讀者諸君は眞勇の人ハーヱロック、イングリス、ネール、アウトラム等の名を憶ひ出し給はん。まことに是等の人々や、騎士の心情を有し、敬神者の精神を保ち、殉教者の氣魄を有するものと謂ふべし。モンタレムベルト(譯者註、十九世紀佛の政治家、著述家)彼等に就いて曰く『彼等は人間種族の名譽を增すものなり』と。されど此恐ろしき患難に當りて萬人皆立派にふるまひたり。婦人も政治家も軍人も(上は將帥より下は一兵卒、一喇叭手に至るまで)皆然り。彼等は選拔の人にはあらず、我等が日々家に於て、巷に於て、工場に於て、クラブに於て逢ふ普通一般の人なり。然りと雖も、一たび災禍の之に臨みては、各人皆豐富なる工夫精力をあらはして、一人々々が勇武になりぬ。モンタレムベルト曰く『一人として畏縮し恐怖せしものなし。總ての軍人、政治家、年老いしも、年若きも、將帥も兵卒も、忍耐し戰鬪し、泰然自若として死に就きたり。英國公共敎育の非常なる價値を輝かせしは實に此時にありき。此公共敎育は英人をして青年の時より自己の力と自由とを利用し、團結し、忍耐し、何事をも恐れ

ず、何事にも驚かず、自己のみの努力にて人生の艱難辛苦に我身を全うせしむるものなり』と。

ローレンス家

デルヒを取り印度を救ひたるものはサー・ジョン・ローレンスの力なりと云はる。ローレンスと云ふ名は、西北方の各州にては「力」の意に用ふ。彼が職分、熱心、努力の標準は、甚だ高かりき。彼の下に働くものは、皆彼の精神に自づと激勵せられたり。彼の品性だけにて一軍だけの價値ありと云はれたり。彼の兄弟サー・ヘンリー・ローレンスも亦かくの如き人なりき。ヘンリーはパンジヨーブ軍隊を組織したる人、此軍隊はデルヒの戰に大功を立てたり。兄弟共世にも稀れなる愛と信任とを以て周圍のものを勵ましたり。二人とも勇武なる性格の眞要素の一なる柔和の性質を有したり。二人とも人民の中に住みて之を力強く感化して善に向はしめたり。就中、エドワーヅ大佐の言ひし如く『二人は青年等の心中に手本を描きぬ。青年等は出でゝ施政にあたるや、此手本に倣ひたり。二人は一の信仰を造り、一の派を產みぬ。而して此信仰と派とは今も猶ほ生き居るなり

ニコルソン

サー・ジョン・ローレンスは、其側にモントゴメリー、ニコルソン、コットン、エドワーヅの如き、自分と等しく敏捷、確志、大精神を持てる人々を有せり。ジョン・ニコルソンは、其立派なること、男らしきこと、心の高きこと、世にも稀なりき。『頭より足に至るまで賢哲』なりと土人は言ひ、ダルハウジー卿は『力の塔』と言へり。何事を爲しても、彼は偉大なりき。そは彼が全心全力を盡して爲すを以てなり。されば部下の士兵は彼を賞讃すること一通りならず、ニキルセーン（譯者註、ニコルソンを彼等は訛りてかく呼びしなり）を崇拜して神の如く思へり。餘りの愚さよとてニコルソンはかゝる輩を戒めたれど、尙依然として其崇拜を續けたり。其耐久の精力と固執とについては、彼が第五十五番の印度軍隊を追ひたる時の一事を語らん。彼既に廿時間續いて馬上にあり、七十哩以上を追ひたり。敵軍がデルヒに其軍旗を立てたる時、ローレンスとモントゴメリーはパンジョーブ軍隊の支持に信賴し、彼等が此事に當りて確信を以てせんことを迫り、自己の州郡の亂れざらん爲めに力を盡し、同時に英兵或は士兵の優れたるものをデルヒに向はしめたり。サー・ジョン・ロー

レンスは、時の總指揮官に對して『デルヒに迫り、敵の鼻に取りつきて動かざる』由を申し送り、同時に軍はニコルソンの指揮の下に進軍したり。後ニコルソンの墓に泣き崩れし粗野なる士兵の言ひし如く『其軍馬の足音は數哩を隔てゝ聞えたり。』

デルヒの包圍

デルヒの包圍と攻撃とは、此印度擾亂中の最も著しき事件なり。唯其強き興味を起す點に於ては、ラックナウの攻圍に稍々劣れるのみ。ラックナウにては、其戰員の大半を失ひたる三十二聯隊が、勇敢なるイングリス將軍の下に六ケ月の間二十萬の武裝せる敵に對立せしなり。デルヒに於ても、亦外見上英國より敵を攻圍したる如けれど、實は攻圍せられたるなり。味方はまことに少數、歐人と土人とを交へし三千七百の兵のみ。日々叛軍より攻撃せられたり。敵軍の數は時には七萬五千人にもなりしことあり。皆もと英國の士官に依りて歐洲的軍事敎育を以て訓練せられたるものにて、恰も無盡藏なる軍器糧食等を有せり。勇敢なる小軍隊(譯者註、英國軍を云ふ)は、デルヒ市の前、熱帶の太陽の燃ゆるが如き光の中に立ちたるなり。死と傷と熱病とを以

てするも、彼等を其目的より轉ずる能はざりき。三十回彼等は山をも蔽はんずる敵の大軍に攻撃せられぬ。而して一々これを逐ひ返しぬ。大尉ホドソン

大尉ホドソン

も此處にて勇敢に働きし人なるが、後曰く『余は敢て言ふ、若し英國民の外なりせば、何處の國民にても茲に固守する能はざりしならん、又敗北を避くる能はざりしならん』と。英軍の勇士は、一度も其務に怠りしことなし。崇高なる堅忍を以て彼等は進み戰ひ、決して挫折することなく、遂に危きを冒し、破隙より突貫して城を陷れ、デルヒの城壁には、英の國旗飜々として風にたなびけり。兵卒も士官も將帥も皆偉なりき。苦難の生活に慣れ居る兵卒も、安樂なる家にて育てられし若き士官も、同樣に其剛毅をあらはし、此恐ろしき戰に同樣の名譽を得たり。英民族固有の剛健と英國訓練の健全との力強く表明せられしこと之に及ぶものなし。此處にて人民其者が、英國の最も大なる產物なることが強く證明せられしなり。我英國歷史中の此偉大なる一章の爲めに拂はれたる代價や、まことに少々にあらざりき。されど今生けるもの又後に生るゝもの、是に依りて學ぶ所あらば、之に拂ひし代價や如何に大なる

も『大に過ぎたり』とは謂ふ能はざるべし。

傳道の勤勞者

然りと雖も、戰に於てならずして、平和博愛の事業に於て、諸國の國民は印度及び東亞にて英人に劣らざる精力と勇氣とをあらはせり。『劍の英雄』(譯者註、軍人のこと)が記憶せらるゝなれば、『福音の英雄』(譯者註、基督敎傳道師)も之を忘るべきにあらず。サヸアーよりマーティン、ウイリアムス(譯者註、皆東洋傳道者)に至るまで、有名なる宣敎の人相續いて起る。皆崇高なる犧牲の精神を以て働き、俗世の名譽を希ふことなく、唯同胞人類の迷者を見出して之を救はんとの唯一の希望に勵まされたるなり。不屈不撓の勇氣と忍耐とを以て、彼等は慘苦に堪へ、危難を冒し、疾病を意とせず、凡ての勞苦、疲勞、艱難を忍びて、喜びつゝ其目的に進み、殉敎に於てすら其身を輝かせり。

東洋に於けるフランシス・サヸアーの傳道

是等の人々の中、最初最も有名の一人はフランシス・サヸアーなり。門地高き血統に生れ、快樂權力名譽、之を得んとして得られざるなかりしも、彼は其生涯に依りて世に位階より高き目的物あり、蓄財より潔き渴仰心あることを證せり。彼は其擧動に於て、情操に於て、眞正の紳士(ジエントルマン)なりき。勇敢、高潔、寬容に

して人に導かるゝこと易しと雖も人を導くの力あり、人に說服せられ易しと雖も人を說服する力あり、誠に忍耐剛毅、精力ある人なりき。齡二十二歲にして巴里大學に哲學の講師として生活の資を得つゝありき。此大學にてサヸアーはロヨラ(譯者註、西班牙ジエスイット敎會の設立者)を親友として得、後幾ばくもなくして改宗者の一小團の羅馬に至る巡禮を司れり。

葡萄牙のジョン第三世が、其印度の領地に基督敎を傳播せんと決せし時、ボバディルラは最初の傳道師として選ばれたり。されども、此人病氣にて任に堪へざりしかば、更に選拔の必要生じ、遂にサヸアー之に選ばれたり。サヸアーは破れたる袈裟を修繕し、唯一卷の日課祈禱書を携へて直ちにリスボン(譯者註、葡萄牙の港)に向つて出立し、此處より東に向つて發航せり。彼此船にてゴアに向ひしなるが、船中に知事あり、ゴアの守備隊に加はる一千の兵を有し居たり。一船室サヸアーのために給せられしも、彼は常に甲板にて繩の一束を枕として寢ね、又水夫と同食せり。水夫の需要を顧みて、其娛樂の爲めに罪なき遊戲を發明し、其病氣の時看護の勞を取り、彼は全く水夫等の心を得

たり。水夫等は彼を敬ひ崇びたり。

ゴアに到着して、サヸアーは人民の墮落に驚きぬ。土人も移住民も皆腐敗し居たるなり。移住民は、文明社會の制裁なきに乘じて惡德を輸入し、土人は唯まさに移住民の惡例に倣ふのみ。サヸアー市の街巷を經めぐりて、鈴（ベル）を鳴らしつゝ人民に其兒を敎育する爲め己の許に送らんことを望めり。暫時にして彼は多數の學生を集むるを得、日々細心に之を敎へ、同時に病者、癩病患者、貧窮人等を訪問し、其慘苦を和らげ、之に眞理を傳へんとせり。人間苦痛の聲にして、一たび彼に達せしものは、彼之を看過せしことなし。マナールの眞珠採取者の腐敗と不幸とを聞き、之を訪はんとて出發しぬ。而して彼の鈴（ベル）は再び『情（なさけ）の招き』を鳴らしたり彼は洗禮を施し、又敎へたり。されど敎育は唯通譯者の媒介に依りてなせしのみ。彼の最も雄辯なる敎訓は、貧窮者の缺乏と困窮とを顧みしことと是れなり。

彼は尙ほ進みぬ、其鈴（ベル）はコモリンの海岸を沿うて町村の間に、寺院や勸工場の間に響きぬ。かくして彼は人民を其周圍に呼び集めて之に敎へたるな

り。彼は宗敎問答書、使徒の信條、十誡、主の祈り及び敎會の儀式書等を飜譯せしめたり。之を暗記して、子供が暗記するまで之を讀み聽かせ、次に子供等をして其兩親隣人に之を敎へしめぬ。コモリン岬に於て彼は三十人の敎師を任命しぬ。此三十人は彼の支配の下に三十の敎會を各一つづゝ司れり唯其敎會と稱するもの、粗末にして、多くは屋根に十字架を有する小屋に過ぎざるのみ。此處より彼はトラヴァンコアーに赴きぬ。村より村と經めぐりつゝ、勞れて手を擧ぐるに堪へざるまで洗禮を施し、聲の聞えずなるまで其言葉を繰返したり。彼自身の記する所に據るに、其使命の成功は、其最高の豫想に超えたりと云ふ。彼の純潔、熱烈、淸高なる生活と、其爲す所の常人に勝ること大なる、到る處に改宗者を造りぬ。而して唯同情の力に依りて彼を見彼の言を聞くものは、知らず識らず彼が熱誠の氣を身に受けたり。

『收穫（かりいれもの）は多く工人（はたらくもの）は少し』（譯者註、新約聖書馬太傳第九章三十七節にあり、信者となすべき人は多くして、傳道者の少きを云ふ）との感に打たれて、サヸアーは次にマラッカ及び日本に航せしが、かくて身は實に全く見ず知らざ

る人種、全く知らぬ言語を語る人種の中にあることゝなれり。此處にて、爲し得ることは唯泣き、祈り、病者の枕を滑かにし、病床に侍り、時々は其袈裟の袖を水に浸して之より數滴を絞り、以て瀕死の病者に洗禮を施したりき。萬事に希望を抱き、何物をも恐れずして此勇壯なる眞理の戰士は、信仰と精力とに依りて猛然としてまつしくらに進みたりき。まことに彼は言ひぬ『一人の靈魂の救濟の爲めには、如何なる死と苦難とが我に臨み來るも、一万回も之を忍ぶつもりなり』と。彼は飢渇と戰ひ、苦難と戰ひ、種々の危險と戰ひ、而も休むことなく勞るゝことなくして其愛の使命を逐ひたりき。十一ヶ年の勤勞の後、遂に此大偉人は支那に入らんと計り居しとき、サンチアン島にて熱病に罹り死して此處に光榮の冠を得ぬ。彼に勝りて高潔、純清、滅我、勇壯なる偉人は恐らくは未だ地上に出でざるなるべし。

　宣教師にしてサギアーの例に倣ひて働きしもの他にもあり。例へば、シュワルツ、ケレー、マーシュマンの印度傳道、ガッラフ、モリソンの支那傳道、ウィリアムスの南海傳道、リギングストーンの亞弗利加傳道の如き是なり。エロ

ジョン・ウイリアムス

マンガの殉教者ジョン・ウィリアムスは、其初め一鐵工に小僧たりき。彼懶惰なりしも、其仕事には敏捷にして、甚だ熟練したりし故、主人は常人には出來難き程の六ヶしき鍛工の仕事を敎へたり。彼は鐘を懸けること及び其他の事を好みて、店より脱け出づることを常とせり。偶々聽きたる說敎は、彼の心に確き基礎を與へ、彼は日曜學校の敎師となれり。彼の屬せし傳道會社の集會の時、彼は某傳道事業の企てに注意せしが、此事業に身を委ねんと決心せり。彼の願は倫敦傳道會社の承認する所となり、彼の主人は其奉公期限の切れぬ前に店を去ることを許したり。太平洋の諸島、特にタヒチのヒュアハイン、ライアティア、ラロトンガ等は、彼の傳道の主なる場所なりき。使徒等の如く(譯者註、彼使徒保羅(ポーロ)が天幕を造りて生計を營みつゝ傳道したるが如きを云ふ。)彼も其手を以て勞作しぬ、即ち鍛冶、庭作り、船大工等を勉めたり。彼は島の人々に宗教の眞理を傳ふると共に、文明社會の技術をも敎へんと力めぬ。

彼がエロマンガの海岸に於て野蠻人の爲めに慘殺せられたるは、此不屈なる勤勞の間に於てなりき。殉教者の榮冠に値するものにして彼の如く然る

はなし。

博士リギングストーン

博士リギングストーンの生涯は、總ての中最も感興深きものなり。彼謙遜抑讓の風を以て自己の經歴を語りたり。由來謙遜抑讓は彼の特質なり。彼の先祖は貧なれども正直なるハイランド人(譯者註、ハイランドは英國蘇格蘭の一部なり)なり。其祖先の一人に其智慧と謹慎とを以て此地方に有名なる人ありしが、其死せんとするや、小供等を呼び集めて、次の如き語を只一の遺產として殘したりと。曰く『余は一生の間、出來るだけ我家系に關する傳說を集めて之を調べしが、我祖先に不正直の人を一人も見出すこと能はざりき。故に若し御身等の中にても、御身等の小供の中にても、不正直の擧に出づるものありとも、是れ我家系に不正直の血液が流れ居るためにあらざるなり。不正直と云ふことは御身等に屬し居らざるなり。余は御身等に一の敎訓を遺さん、曰く「正直なれ」と云ふこと是れなり』と。

リギングストーンは、十歲の時グラスゴーに近き一製綿會社に送られ、「補綴者」として働きたり。其第一週の給料の一部を割きて、彼は拉丁語の文法書

を求め、拉丁語の研究を開始し、一夜學校に通ひて多年の間之を學びたり。彼は朝六時より工場にて働くべかりし故、母は夜は早く彼を臥さしめしが、母然せざるときは、十二時又は其以後までも拉丁語を勉强せり。かゝる方法にて、彼はヴージル、ホレース(譯者註、共に羅馬の詩人なり)の作を繙き、小說の外は手に觸るゝ拉丁語の書物を博く讀み、就中科學書及び旅行書を耽讀せり。彼は幾許もあらざる其餘暇を植物學の研究に用ひ、近隣をさまよひて植物を採集せり。彼はまた工場の器械の運轉する騷然たる中にも其讀書をなしぬ。即ち紡績器械の上に書を載せて、此器械の運轉する每に、一節づゝを讀みゆけり。かくの如くにして此剛毅なる青年は、多大の有益なる知識を得しが、其長ずるに及んでや、異敎徒に傳道せんとの望みを起したり。此目的を以て彼は醫術を學び始めぬ。是れ外國傳道の上に便あらんと思ひし故なり。是に於て彼は其所得を儉約して其必要の學資を貯へ、每歲冬はグラスゴーの醫學、希臘語、及び神學の講義に列し、春夏秋は紡績職工として働きたり。かくの如くにして彼は其大學生活の間は、工場の職工としての全く自己の所得に

依りて我身を支へ、一錢と雖も他人の補助を受けしことなし。彼は後正直に語りて曰く『今我勞苦の生涯を顧みて、余は勞苦の生涯そのものが、我早年敎養に實益ありしを感謝せざるを得ず。若し出來得べくんば再び等しく貧困なる境遇より人生の行路を始め、等しく苦難なる試錬を過らんことを欲す』と。彼は遂に醫學の課程を卒へ、拉丁語の卒業論文を草し、試驗を終へて醫學學士會より醫師たるの免許を得たり。

是に於て彼は先づ支那に赴かんと欲しぬ。されど時恰も英國は支那と戰端を開き居たるを以て、此目的を實行すること能はず。倫敦傳道會社に申出てゝ彼は亞弗利加に送られたり。而して千八百四十年、彼亞弗利加に到着せり。彼は自己の努力にて支那に行かんことを務めたり。彼は言ひぬ『余が倫敦傳道會社の委任にて亞弗利加に赴くについて只一の苦痛あり。そは今日まで自ら自己の道を開きつゝ來りしものが、或意味に於て他人に倚りかゝることになりしことの快からぬによれり』と。（譯者註、傳道會社より派遣せらるることゝて、一切の費用も會社より受け、又其命令に從ふことゝなるなり）。

亞弗利加に到着して、彼は非常なる熱心を以て其事にあたり始めぬ。彼は單に他人の勤勞の上に衣食するを忍ぶ能はずして、大部の獨立事業を開始したり。敎育の外に、建築其他の手工に於て手先の勤勞をなしたり。彼は曰ひぬ『是等の勤勞は、余が紡績職工たりし時の如く、いたく余を疲勞せしめて、夜間の勉學に不適當ならしめたり』と。ベクアナス人の間に勤勞し居りし際、彼は溝渠を掘り、家を建て、野を耕し、家畜を養ひ、土人に勞作と禮拜とを敎へたり。彼が最初土人と共に徒歩にて長旅行に出でし時、彼は土人が彼の外形、精力について語るを洩れ聞きぬ。――彼等は曰ひぬ『彼は强健ならず、彼はいたく瘠せ居れり、たゞ袋（ヅボンのこと）の中に入れ居る故に丈夫らしく見ゆるのみ、速に疲れはつるならん』と。こはリヸングストーンのハイランド的血液（譯者註、由來蘇格蘭人は質朴剛健にして血性に富めり故に云ふ）を湧き立たしめぬ。彼は憤然として起ち、疲勞を意とせずして全速力に歩み出し、爲めに土人は幾日も全速力に歩むべき厄運に會し、遂にリヸングストーンの健脚を認むるに至りしと云ふ。

彼が亞弗利加にて爲せし事、又如何にして事に當りしかは、彼の著『傳道(ミッショナリー)旅行(ツラベルス)』に依りて知るを得。彼の行として知らるゝ中の最後の一は、誠に能く彼の特質をあらはせり。彼の亞弗利加に持ち行きしバーケンヘッドと云ふ汽船は用に立たざりしかば、彼は二千磅を以て直ちに新しく一汽船を造らんことを家に言ひやりたり。此二千磅には彼が旅行に關する著述より得し金を子供の爲めに貯へ置きしを用ふべしとなりき。『子供等は自ら之を造るべきなり』とは、彼が金の使用を家に命ずるときに用ひたる言語なり。

ジョン・ハワード

ジョン、ハワードの生涯も、亦堅忍の力を著しく例證す。彼の尊崇なる生涯は、肉體の虛弱を以てしても、職分の遂行の途中に於ける大障碍を除くを得ることを證せり。囚人の境遇を改善せんとの念は、彼の全思想を奪ひ、煩惱の如く彼につきまとひぬ。辛勞も、危難も、肉體の苦痛も、此大目的より彼を離すこと能はざりき。彼由來天才の士にあらず、只普通一般の人なりしと雖も、其心情は純潔に、其意志は確固なりき。其生時に於てすら、彼は大なる成功を得しが、其感化力は彼の死すると共に死せざりき、否、綿々相續きて英國のみな

らず、凡て文明國の法制上に强大なる影響を及ぼして今日に及べり。

ジョナス・ハンエー其生涯

ジョナス・ハンエーは、英國をして今日あらしめたる多數の堅忍剛毅なる人の一人なり。是等の人は精力を盡して其職分を遂行し、職分終はりしときは、感謝して永遠の旅に上り、

己の生涯に依りて改善したる
世をのみ遺產として殘せり。

ハンエーは、千七百十二年ポーツマスに生る。父は造船所内の販賣店の主人なりしが、ふとした事にて命を失ひ、ハンエーは早く旣に孤兒となれり。母は其子女を率ゐて倫敦に赴き、此處にて子女を入學せしめ、之を立派に養育せんとして奮鬪せり。十七歲にしてジョナスは一商人の丁稚たる爲めリスボンに送らる。ジョナス業に就くや、細心綿密、事に當るや規律正しく、且其心高潔正直なりしかば、彼を知るものの皆尊敬愛護せり。千七百四十三年倫敦に歸る。偶々セント・ピータースバークにある英國商會の組合人たるを薦められて之を受く。此商會は當時尙ほ幼稚なりし裏海(カスピアンシー)の通商に從事するものなり。

ハンエーは此通商の業を擴張せんと志して露西亞に赴きぬ。露都セント・ピーターースバーグに到着して後、暫時にしてハンエーは英國の織物細二十車より成る隊商を率ゐて波斯(ペルシア)に出立しぬ。彼はアトラスカンより裏海の東南岸アストラバッドに向つて出帆したり。されど到着して未だ積荷の陸揚を終へざるに、一隊の土寇あらはれて貨物を奪掠したり。彼後貨物の主部を取戻したれども、其企畫の成果は、爲めにいたく損ぜられたり。尚ほハンエー及び其仲間を捕へんとの計畫の始まり居るを知り、彼は海路より逃れ、幾多の大なる危難を經てギランに到着せり。彼後『決して失望する勿れ』と云ふを以て其生涯の標語とせしが、此語を初めて思ひつきしは此逃走の時なりき。

後ハンエーはセント・ピーターースバーグに住むこと五年間、其商賣大に繁昌せり。されども一親戚死するに臨み、若干の財産を彼に遺し、彼また巨多の富を有せしかば、彼は露西亞を去りて一千七百五十年其故國に到着せり。其英國に歸りし目的は、彼自ら言ひし如く『其健康を顧み(彼の健康は極めて惡かりき)出來るだけ自分及び他人を益せんため』なりき。此後の彼は、同胞人類

に慈善と有用とをなして日々を費せり。彼は自ら奉ずること薄かりき。これ其收入を出來るだけ多く慈善事業に用ひんためなりき。種々の公共改善に盡力せしが、其第一は倫敦の街路の改善なりき。此改善事業に於て彼は大に成功せり。佛蘭西が侵入するとの風評、千七百五十五年に行はれしが、ハンエーは海軍々人の供給を保つ最良法もがなと注意する所ありき。彼は先づローヤル・エキスチェンジに於て商人や船主の集會を開き、陸上の義勇兵や少年を奬勵して軍艦に勤務せしめんための一協會を組織することを提議せり。提議は熱心を以て承けられたり。一協會組織せられ、其士官も任命せられたり。而してハンエーは此協會の全活動を指揮することゝなれり。其結果として千七百五十六年海事協會組織せられしが、此協會は國家の利益をなせしこと甚だ大にして、今日に於ても亦大實利あり。其組織後六年にして、五千四百五十一人の少年と四千七百八十七人の陸上義勇兵、此協會にて訓練せられて海軍に加はりたり。而して今日も此協會は盛に活動しつゝありて、年々約六百人の貧少年は、注意深き敎育の後、重もに商業事務に於て水夫とし

て用ひらる。

ハンエー氏は尚ほ其短き時間を割いて倫敦に重要なる公共的建物を建設し、又は之を改善するを力めたり。彼は初より一育兒院に深く關係せり。此育兒院は多年前トーマス・コラムの創設せしものなるが、之あるが爲め世に其兒を之に託せんとして棄つるもの多き有樣となり、世に益をなすよりも寧ろ害をなす有樣に迫り居たり。ハンエー此弊害を除かんことを力めんと決心し、當時流行の慈善の風に反對して此事に當りしが、其目的に固執して遂に首尾よく育兒院を其本來の目的に適ふやうなせり。時進み人々經驗を積むに及び、ハンエーの正しきこと解りたり。廢業娼婦院も亦其大部はハンエー氏の盡力にて建てられたり。然りと雖も、彼の最も勞し最も努めし事業は、寺領の貧兒についてなりき。寺領の貧者の子が成育する有樣の悲慘粗放なる、其頻々として病に斃るゝことは誠に驚くべきものありき。然れども時に之を救はんとする計畫は一も始まらざること、棄兒の場合に於けるが如し。是に於てかジョナス・ハンエーは其渾身の精力を集めて此事業に從ひぬ。

唯一人他の幇助なくして、彼は先づ獨りの探索にて災害の範圍を確かめぬ。彼は倫敦に於ける最貧者の住家を探檢し、貧民病院等を訪問し、是に依りて倫敦及び其附近の各貧民院の遣方(やりかた)を詳に究めたり。彼は次に佛蘭西に旅行し、又和蘭國內を旅行して貧民院を訪ひ、自家の貧民病院設立に採用せらるべきものに注意せり。

かくして彼は五年間を海外に費し、英國に歸るや、其觀察の結果を著述にして出版せり。其結果として多數の貧民院は改革せられ改善せられたり。千七百六十一年ハンエーの議容れられて一條例發布せられぬ。此條例は倫敦の各寺領が每年引き取りし小兒、出せし小兒、死せし小兒のことを記錄に留めしむるものにして、彼は此條例を効力あらしめんと意を注ぎ、自ら不撓の注意を以て其實行を管理せり。彼は午前は甲より乙へと貧民院を廻り歩き、午後は甲より乙へと代議士の許を訪へり。かくの如くして日々、年々、拒絕を忍び反對に答へ、人の不機嫌や怒に遇ふも溫顏を以て之に對せり。世に類(たぐひ)なき堅忍と殆ど十年間の勤勞の後、自己の費用のみにて遂にまた尙ほ一條例

の發布を得たり。此條例に曰く、死兒の名あるものにして、寺領に屬する嬰兒は、貧民院にて養育すべからず、市外若干里の場所に送り、六歳に及ぶまで三年毎に選ばるゝ保育者の下に養育すべしと。貧民は此條件を呼びて『小兒の生命を保つ條例』と云へり。而して是より以後の年錄は、以前の年錄に比して數千の生命の保たれたるを示せり。而して是れ實に此善良にして感情的なるハンヱー一人の盡力に由るものなり。

倫敦にて慈善事業が始まりしと云へば、其何處如何なる處なるかを問はず、ハンヱーの之に關せること確かなり。烟突掃除人の子供の保護に關する最初の條例の一は、彼の盡力に依りて發布せられたるなり。彼はモントリール、ブリッヂタウン、バーバドースの大火に際して遭難者の救助のため一時醵金に盡力せり。寄附金の名簿に彼の名の無きことなく、其無私と誠直とは一般社會の認むる所となりぬ。されど彼は其小財產を全く他人の爲めに費すことを許されざりき。銀行家ホーアーを首とせる五人の重もなる倫敦市民は、ハンヱー氏の知らぬ間に時の大宰相ブート卿に謁し、市民を代表せり

とて此善良なるハンヱーの私心なき功績に注意せんことを求めたり。其結果彼は暫時にして海軍給糧の委員に擧げられたり。

晩年ハンヱー氏の健康甚だ損じぬ。されば給糧部の椅子を辭するの必要に迫りしも、彼は無爲にしてあるを好まずして、或は日曜學校の設立に與かり(こは當時尙ほ初興の有樣なりき)或は貧窮なる黑人の救助に勉め(多數の黑人窮乏にして倫敦の市中をさまよひ居たるなり)或は社會下層の貧民の苦難を減ぜんことを計りたり。彼が社會の種々なる悲慘痛苦に接せしにも拘はらず、其快活なることは世の常ならず。此快活の氣風なかりしならば、彼の如き病弱の身を以て、彼の如き巨多の苦難の業を遣り通すことは到底不可能なりしならん。彼の恐れしは只『不活動』のみ、他に何事をも恐れず、身弱かりしと雖も、彼は大膽にして不屈不撓の元氣あり。其道德的勇氣は第一等のものなりき。彼は初めて頭上に傘を戴きて倫敦の市街を敢て步みし人なり。かくの如きことを云ふは、誠に瑣細のことゝ思ふ人多からん。されども近時の倫敦商人をして尖れる支那帽を戴きてコーンヒルに沿うて步ましめ

ば、其者はこれにて辛抱するには多少の道德的勇氣を要するを悟るべし。ハンエー氏が三十年間自身が傘を用ひし後一般社會は漸く之を採用するに及びたり。

ハンエーは洵に清節、眞實、誠直なる人、其一言一句悉く信ずるに足れり。彼は人より殆ど崇拜とも云ふべき程の尊敬を受けたり。こは其正直なる商人の理想的品性を有すと云ふ點よりなり。されば彼を自負に誘はんとせしもの只此點に於てのみなり。彼は其言ふ所を嚴格に實行せり。商人としても、給糧部の委員としても、一の汚點を留めざりき。彼は契約者より少しの贈物を受けず、其給糧部にあるの時贈物を呈するものあれば下の如く言ひて丁寧に書を送り返せり。曰く『余は此役所にある人よりは、決して何物をも貰はざることを我常則となし居れり』と。其死期の近きを知りし時、快活なる心を以て死の準備をなせし有樣、地方に旅立つ準備をなすが如し。彼は諸所を廻りて取引の商人に金を拂ひ、友と訣別を告げ、其事務を整理し、身を清めて靜肅に平和に我生と別れたり。時に齡七十四なり。其遺產は二千磅に至らず、血族

親戚の之を要するものあらざりしかば、其生時相知る所の孤兒と貧民との間に頒てり。上述の如きは簡單なるジョナス・ハンエーの美しき一生なり、洵に彼や正直、強精、勤勉、誠實なる人なりき。

グランギル・シャープの博愛的勤勞

グランギル・シャープの生涯も、亦個人精力の力を實證するものなり。此個人精力や、彼より相傳へて奴隷廢止の事業に力めし數多の高潔なる人士に及びしもの、而して其中最も有名なる者としてクラークソン、ウィルバーフォース、バックストン及びブルーハムあり。是等の人奴隷廢止の事業に於て各偉人と稱すべしと雖も、其最先に進みしはシャープなり。而して其堅忍、強精剛膽の點に於て、シャープは最偉なるべし。彼はタワー・ヒルの麻布商の徒弟として其生涯を始めしもの、其奉公期限終はるや、此職より退き、大砲局に書記として入れり。彼が其乏しき時間を以て黑奴解放事業に從ひしもの、實に此一卑職に在るの時なり。彼は常に(其徒弟たる時にも)奮て難事に當り、以て益ある目的を達せんとせり。麻布商の家に徒弟として職を學べる時のことなりき、仲間の一徒弟ユニテリアン(譯者註、耶蘇教徒の一派なり、正しき信

仰より甚だ異れる信仰を抱ける一派にして、宗教問題について屢々シャープに討論を挑みたり。此青年ユニテリアンは主張すらく、聖書の某所についてのシャープの三位一體的の誤想は、其希臘語を知らざるに起因すと。是に於てシャープは直に希臘語の研究を始め、毎夕之を學びて暫時にして之に熟達するに至れり。又仲間の徒弟に一猶太人あり、之と舊約の豫言の解釋について討論をなし、遂にまた困難なる希伯來語を研究して之に通ずるに至れり。

一事あり、此事彼の一生の主事業に基礎と方向とを與へたるが、これ其寛容、慈惠に起因せり。彼の兄弟ウィリアムは、ミンシング・レーンの外科醫にして、貧民を施療し居たりしが、數多治療を望むものゝ中にジョナサン・ストロングと呼ぶ貧窮なる亞弗利加人あり。此黑奴は時に倫敦に住みしバーバドースの一辯護士を主人とせしが、此者彼を虐待すること甚だしく、爲めに跛となり、殆ど盲目となり、勞働に堪へずなれり。是に於て主人、ストロングが動産としての價全くなくなりしを知り、殘酷にも之を放逐して街路にさまよ

うて餓死するに任せたり。嗚呼あはれなる黑人なるよ。彼やたゞ『病の一塊』のみ、暫しは乞食して身を支へしが、遂にウィリアム・シャープの許に來りしなり。ウィリアムは之に藥を與へ、間もなく之を聖バーソロミューの病院に入れてやりしが、此黑奴は幸にも全快したり。

ストロングが病院より出て來るや、シャープ兄弟は之を保護して、市場に賣らるゝことなきやうにしたり。されど此時二人は此黑奴の引渡しを要請するものあるべしとは夢にも想はざりき。二人はストロングの爲め一製藥舗に働き口を見つけやり、彼は其家にて二年間勤めたり。偶々主婦に侍して貸馬車の後に居りし時、舊主人バーベドースの辯護士之を認め、健康舊に復して再び價値を生ぜし此奴隷を取り戻さんと決意せり。彼は市長の捕吏を用ひてストロングを捕へ、之をコンプターの獄に投じ、間もなく之を西印度に辨送せんとなし居たり。黑奴は數年前大困難の場合にグランヸル・シャープが彼の爲しくれたる深切を捕獄の中に思ひ起し、一書をシャープに贈りて助を求めたり。時にシャープはストロングの名を忘れ居り、直に使を遣はして

之を糺さしむ。使歸り報じて曰く、番人はストロングなど云ふ者を知らずと答へたりと。彼の疑は强まりぬ。乃ち直に牢獄に赴きてジョナサン・ストロングに面會したしと主張せり。中に入るを得て今は再度捕へられて奴隷として囚監の下にある黒奴を見て直に思ひ出す所ありき。シャープ氏は牢獄の長に求むるに、ストロングが市長の前に引き出さるゝまで、決して之を他人に渡すべからざることを以てし、之に背かば獄長の身に過ちあらんと言ひ渡したり。而して直に市長の許に赴き、權能なくして徒らにストロングを捕へて投獄したる人の喚び出しを求めたり。かくて被告と原告とは市長の前にあらはれぬ。ストロングの舊主人なる彼辯護士は、ストロングを他に賣り渡せしにて、此者は賣渡證を出して奴隷の所有權を要求せり。かくの如きを以てストロングには一の罪なく、又市長はストロングの自由等に關して法律問題にたづさはる權利なきを以て、ストロングを放免し、ストロングは市役所より出でゝ恩人シャープに從ひ行きしが、誰人も敢てストロングに手を觸るゝものなかりき。黒人の新主人は直にシャープに黒人取り戻しの訴

をなしたる由を告げて曰く、我黒奴を盗まれたりと。

當時は(千七百六十七年)英人各自の自由は一の說としては確立し居りしも、實際上自由の侵害せらるゝこと一二にして止まらず殆ど日々之を侵されたり。海軍に服從せしむるため、强ひて人を徴集することは絶えず行はれたり、水兵强募隊の外、倫敦其他國內の大都會にては誘拐者の隊ありて東印度商會の事務に用ひんため人を欺き捕へたり。東印度商會にて之を要せざるときには、亞米利加殖民地の植民者に舟送せり。黒奴は倫敦及びリヴァープールの新聞紙にて公然廣告して賣りに出されたり。逃走せし奴隷を發見し捕獲して之を河の一定の船に送り下すものには報酬を與へたり。

英國に於ける奴隷の位置

英國に於ける奴隷の位置は、當時未だ確定せずして疑はしきものありき。法廷にて與へらるゝ判決も一樣ならず、毫も定まれる一の見解の上に立つことなし。英國には一の奴隷をも置くべからずとは一般公衆の所信なりしも、有名なる法律家にして之に反對の意見を抱くもの多し。シャープ氏はジョナサン・ストロング事件について起されたる訴訟に我を防がんため幾人

か法律家の意見を求めしに、彼等は皆一様に奴隷設置に反對せざる意見を有せり。尙ジョナサン・ストロングの新主人がシャープに語る所に據れば、有名なる大法官マンスフィールドを始め裁判官、皆次の如き意見を持して讓らずとのことなり。曰く英國に來りしとて奴隷は自由を得ること能はず、法律上强ひて再び之を殖民地に歸らせざるべからずと。事情かくの如きを以てグランヸル・シャープの如き勇氣と熱心とを有せざる人なりせば、當に失望すべきなり。然れども此事はシャープの心を激勵し、其少くとも英國に於ける奴隷の自由の爲めに戰はんとの決心を强むるに過ぎざりき。彼は言ひぬ『辯護士に見棄てられて法律上に余を助くるもののなきにより、自ら見込なき辯護をなすの位地に立ちぬ。されども、要書の外は未だ曾て法律上の書を開きしことなくして、余は法律の實行についても、又其根柢についても、毫も知る所なかりき。此時余はいや／＼ながらも、平素得意になれる本屋が近頃買ひたる法律圖書館の目錄を閱したり』と。

晝の中は專ら大砲局の事務に執掌せしを以て、彼は此局の事務所に最も

シャープが努力の結果

繁忙なる勤をなせり。彼は其法律研究を夜遲くか、又は朝早く爲さゞるべからず彼は身自ら奴隷の如くなりしを感ずと言へり。友の一僧侶に返書を怠りしことを申譯して曰く『余は全く文通をなす能はざる有樣にあり。余が夜の睡眠時間を割き、又朝早く起きて得たる少許の時間は、法律の或個處の探究に是非とも用ひざるべからざりき。而して此個處や一時も猶豫し置く能はずして、而も余の研學上最も勤勉に探究考査するを要せし所なりき』と。

シャープ氏は爾來二ヶ年の間、其捕へ得し餘暇は悉く之を用ひて個人の自由に關する英國の法律を細査せり。――山の如き乾燥無味なる文字に眼を通し、最も重要なる議院の法案、法廷の判決、有名なる法律家の說を拔粹しつゝゆけり。此物倦き長き研究に於て、彼は一人の教師、一人の補助者、一人の相談對手をも有せざりき。彼は自分の企てに利益ある一人の法律家の說をも見出す能はざりき。さりながら彼が研究の結果は、彼自身には滿足すべきものあり、法律家には驚くべきものありき。彼は記しぬ『あゝ全能者に感謝すべきかな英國の法律及び條令の中に――少くとも余の見出し得し限りに

ては――他人を奴隷にすることを正しとする點は毫もあらず』と、彼今や其脚を堅く地に立てぬ、彼今や疑ふところ毫もなし。彼は其研究の結果を概括して記しぬ。此稿本『英國に於て奴隷を置くの不道理』と題す、平易明瞭にして堂々たる著なり。而して此稿本を多數當時の有名なる法律家の間に配布せり。ストロングの主人は、其法廷にて爭ふ人の如何なる人物なるかを知りて、訴訟を延期するため種々口實を設け、遂に妥協を申出したり。シャープは直に之を斥けたり。シャープは、其稿本を法律家の間に流通せんことを力め、遂に原告の代理人は辯論を躊躇することゝなり、其結果原告は訴訟を實行せざる點を以て三倍の損害を賠償することゝなれり。シャープの稿本は後千七百六十九年に出版せられたり。

此頃倫敦に於て黒人を誘拐し、之を賣るため西印度に舟送することに關し、訴訟事件起りたり。シャープかゝる事件を知るを得たるときは、直に奴隷を救はんと努め始めぬ。亞弗利加人ハイラスと云ふものゝ妻が捕へられてバーベドースに送られたることあり。シャープは直にハイラスの名を以て

捕獲者に對して訴訟をなし、之に勝ちて損害の賠償をも得、ハイラスの妻は自由の身となりて英國に歸りたり。

千七百七十年のことなるが、奴隷を強奪して大に慘酷を加へたることあり。シャープは直に捕獲者の足跡を逐へり。事情はかくの如し、暗き夜のことなるが、ルイスと呼ぶ亞弗利加人、此亞弗利加人の主人と稱する者に使はるゝ二人の水夫の爲めに捕へられ、岸に曳き行かれて端艇(ボート)に入れられ、猿轡をはめられ、四足を縛られ、ジャマイカ(譯者註、英領東印度諸島の一)に向ふ船に載せられたり。これ其ジャマイカに着するや否、直に之を賣らんためなり。さりながら憐れなる黒人の叫聲は隣人の注意を牽き、其一人は今は既に『黒人の友』として名あるクランギル・シャープの許に走りて此虐待を告げたり。シャープは直にルイスを取り戻す委任狀を得、グレーヴセンドに進みたり。されど彼の到着せし前、船は既にダウンスに向ひて出帆せり。是に於て人身保護命令の令狀を得て之をスピットヘッドに送り、該船が英の海岸を去る前に、此令狀は用立てり。船に至り見れば、彼奴隷は檣に鎖づけられ、溢るゝ涙を

拂ひも得て、將に無理に去らしめられんとする其英國の土地を恨めしげに眺め居たり。彼は直に解放せられ、倫敦に送り還され、而して逮捕狀は此虐待の實行者に向つて發せられたり。此處置に於てシャープ氏の頭腦、心情、手腕の敏捷なること、誰人か得て之に超えんや。されど彼は遲鈍なりとて自身を批難し居たり。此事件はマンスフィールド卿の前にて審問せられぬ。――マンスフィールド卿の說が、グランギル・シャープの說と相異なれること讀者の記憶する所ならん。さりながら判官マンスフィールド卿は、奴隸の自由如何の法律問題については其意見を發表することを避けたれば、此問題は未だ以て確定せられず、只卿は被告（評者註、奴隸の主人と稱するもの）がルイスが自身の所有なりとの文字上の證據をも持たずと云ふ故を以てルイスを解放したり。

かくの如きを以て、英國に於ける黑人自由の問題は未だ決定せざるなり。されどシャープ氏は、依然として此人道的事業に固執し、其不撓の努力と實行の敏捷との爲めに其後救はれたる奴隸の數少からず。而して時來りて遂

にジェームス・ソマーセットの重大事件起りぬ。此事件は、かの奴隸自由問題を法律上の明白なる決定に至らしめんため、マンスフィールド卿、シャープ氏兩者の希望に依り選ばれたるものなりと云はる。

ソマーセットは、其主人之を英國に連れ來り棄てたるものなり。後かの主人之を捕へジャマイカに送りて賣らんとせり。シャープ氏は例に依りて直に此問題に係はり、黑奴を保護せんため訴訟を起したり。マンスフィールド卿は其意をほのめかせり。曰く事件は大に普遍的の性質を有する故、之については判事全體の意見を徵さゞるべからずと。是に於てシャープ氏は全員を擧げて來る敵軍に對抗するを感じぬ。然れども其決心や毅然として一毫の動くなし。あゝ誠に幸ひなるかな、此激戰の間に於て彼の努力は既に其効ありつゝ始めぬ。此問題に關する世人の注意大に增し來り、名ある法律家にしてシャープに贊成の意見を公表するもの多かりしなり。

今や萬人環視の中に立つ此個人自由の問題は、三人の陪審官を有するマンスフィールド卿の前に公々然として審問せらる。――苟も罪を犯して法

の問ふ所となりしものならずば、英國に於ては誰人も生得上及び憲法上自由を有すとの大原理に基きて審問せられぬ。此大審問について深く敍說するの必要はなし、只論究は永く續き、延期又延期を重ねて短からぬ時を費せしが、終に判決はマンスフィールド卿に依りて與へられたり。卿の強固なる心中にも、法廷の討議にて漸々に變化を生じ、グランギル・シャープの小冊子（譯者註、奴隷の自由を論ぜしかの小冊子のことなり）に基くに至り、茲に公言して曰く、今や裁判所は明かに一の意見を有することになり、十二人の判官に事件を謀るの必要なしと。彼は尙ほ言ひぬ、人を奴隷にすることは、國法之を許さず、かゝる力は英國にて用ひられたることなければ、法律にて承認せられたることもなし、故にジェームス・ソマーセットは解放せらるべきものなりと。奴隷賣買は、是時までリヷープール及び倫敦の街頭にて公然行はれ居りしが、シャープが此判決を確得せしため、自ら罷むに至りたり。シャープは之に止まらず、尙ほ進んで、一度英國に上陸するときは、奴隷は直に自由民となる、との通法を得たり。而して此マンスフィールド卿の大決斷が、主とし

てシャープ氏が始より終りまで健實、勇敢、直往に其目的を逐ひ行きしことに起因するは疑ひなき事實なり。

是より尙ほグランギル・シャープの生涯を敍せんは要なきことなり。彼は種々の善事に其不撓の勤勞を續けたり。彼は救はれたる黑奴の避難所としてシーラ・レオネの殖民地を建設することに盡力せり。彼は亞米利加殖民地にある土人（印度人）の境遇を改善することを勉めたり。彼はまた英國人民の政權擴張の爲めに運動し、海軍々人を强募することを廢止せんことを勉めたり。グランギルの說に曰く、英國の水兵も、亞弗利加の黑人と等しく、法律の保護を受くる權あり。英國の水兵が海上生活を選ぶことは、其英人としての權利と特權とを棄つる所以にあらずと。而して彼は英人の權利の第一として個人自由を數へたり。シャープ氏は尙ほ英國と亞米利加に於ける英國殖民地との間に親交を恢復せんことを計りしも、これは其効なかりき。而して亞米利加獨立戰爭（一種の兄弟喧嘩）の起りしや、彼はかくの如き不自然の事端に關するを好まずして、其大砲局の椅子を去りたり。以て彼が純潔の心の

盛なるを知るべし。

最後までシャープは、其生涯の大目的なる奴隷廢止を固執したり。奴隷廢止の事業を行ひ、且次第に増し來る同志の努力を統一せんため、奴隷制度廢止協會なるもの創設せられ、シャープの手本と熱心に勵まされて彼を助けんとして出づる人二三に止まらず。彼の精力は是等の人々の精力となりぬ。而して彼がたゞ獨り長く勤勞したる犧牲的熱心は、國民の心に傳染するに至りぬ。彼の後をつぐものクラークソン然り、ウイルバーフォース然り、ブルーハム然り、バックストン然り、彼等も亦シャープの如き精力と堅固の志とを以て、シャープの如く働き、遂に奴隷制度は英國の領地全般を通じて廢せらるゝに至りたり。バックストンは、此大事業の成功に關しては、最も多く名ざさるれども、其主功は勿論グランギル・シャープに歸せざるべからず。彼が此事業を始めし時や、世一人として之を贊成し奬勵するものなし。彼は、最も有力なる法律家の意見に反對し、又時代の最も根深き偏見に對立して、唯一人毅然として起ちぬ。而して只自分だけの努力に依り、自身の費を用ひ、英國

の法律のため英人種の自由のために最も記念すべき戰をなしぬ。次ぎて起りしものは、主として彼の不撓不屈の結果のみ、彼は一の炬火を點ぜしが如し。此炬火は他の心に點火し、甲より乙と轉じ轉じて遂に其光輝全くなりしなり。

クラークソンの勤勞

グランギル・シャープの死する以前、クラークソンは、既に黑人奴隷の問題に注意しぬ。彼は此問題を其大學卒業の論文にせし程にして、心は之が爲めに奪はれ、之をふりはなすこと能はざりき。ハートフォルド州のエーズ・ミルに近く一所あり。此場所にて一日クラークソン其乘馬より下り、心鬱々として路傍の芝に坐しぬ。此處に沈思すること久しくして、彼は遂に全く其身を奴隷廢止事業に委ねんと決心したり。彼は其拉丁語なる論文(譯者註、先の大學卒業論文なり)を英文に書き更へ、新に引證を加へて出版せり。是に於て同志の士、彼の周圍に群がりぬ。是より先、奴隷賣買廢止協會組織せられしが、クラークソンは之を知らざりき。今之を知るに及びて之に加入せり。彼は此奴隷廢止の目的を實現せんが爲め、一切自己の榮達の望を犧牲に供せり。ヴィ

ルバーフォースは、議會にて指導することに選ばれしが、奴隷廢止に利益ある大多數の證憑を蒐集し整頓するの勤勞は、クラークソンの上に落ちたり。

クラークソンの敏捷堅忍の著しき一例として、次に記す所あらん。奴隷制度の主張者は、此制度の保存を庇保して說いて曰く、戰爭にて捕虜となりたる黑人のみ奴隷として賣るなり。若し之を奴隷とせずんば、其故國にて尙辛き運命の下に屆せざるべからざるなりと。クラークソンは、奴隷商人が『奴隷狩り』を行ふことを知れり。されど之を證明すべき一の證人をも持たず。何處に一の證人を見出すべきか。偶然にもクラークソンは旅行の途次、一紳士に逢ひしが、此紳士彼に語るに、一年前共に事をなせし一水兵は、曾て實際奴隷狩りの遠征に加はりたるものなる由を以てせり。紳士は此水兵の名を知らず、ただ朧氣に其容貌を語り得しのみ。彼はまた水兵の何處に居るかを知らず、只其知る所は水兵が常務中の一軍艦に屬すると云ふことのみなり。されども何處の港に其船があるかは知らざるなり。其知り得し所まことにかくの如く微細に過ぎずと雖も、クラークソンは此者を證人として出さんことと

フォーエル・バックストン、其決心と精力

に決心せり。彼は獨り其身を以て常務の軍艦の碇泊し居る各港市を訪ひ、艦內に入りて各艦を調べしが、尋ぬる人を見出す能はず。最後に只一つ殘りし港に至りて、只一つ最後の船に於てかの青年を見出したり。此青年はクラークソンの最も價あり最も効力ある證人の一となりたり。

數年間に、クラークソンは四百以上の人と相知るに至り、證據搜索の爲め三萬五千哩を旅行したり。其絕えざる努力は遂に病を持ち來し、病の爲めに心身共に衰へはてたり。然りと雖も、彼の熱心が遂に充分に公衆の心を動かし、志あるもの丶奴隷に對する同情を燃やすに至るまでは、彼は決して戰場より擔ひ去られざりき。

長き苦鬪の後、年の久しきを經て奴隷賣買は廢止せられたり。されども尙ほ一大事業の成就すべきもの殘れり。何ぞや。曰く――英國領全般を通じての奴隷廢止是なり。而して此事に於ても亦決意精力が成功を得る所以となれり。此運動の指導者中フォーエル・バックストン最も優れたり。彼は下院に於て前にウイルバーフォースの占めし地位を繼ぎたるなり。バックストン

は、少年の時は遲鈍、鈍重なりき、たゞ我意の强きを以て有名なりしが、其我意も始めは亂暴、專横、執拗、頑固としてあらはれたり。彼小兒の時、父は此世を去り、たり。されど幸なることには其母賢にして大に意を用ひて彼の意志を鍛へんと力め、之に服從を强制せしが、又其自己一身のみにて爲すべき仕事に際しては、たゞ自己一人にて決斷し行動するの習慣を養はしめんとせり。彼の母の信ずる所に曰く、堅固なる意志は、價値ある目的に向けられて、正當に導かるゝときは、價値あり男らしき性質なりと。而して彼女は此考に從ひて動きたるなり。他人が其子バックストンの我意について母に注意する所あれば、彼女は答へて曰く『氣にとめ給ふ勿れ、――彼は今まことに我意强し、――されど遂には之が善に向くこと確かなり』と。フォーエル學校に於ていたく怠惰なりき。されば人彼を愚鈍者とし懶惰人と見なせり。彼は自らは跳ね廻りつゝありて、其日課は他人に遣つて貰ひたり。

彼は十五歳にして家に歸りぬ。丈高く不恰好なる若者にして、たゞ端艇、蹴鞠、乘馬、野遊びを好むのみ。――重もに一獸苑管理者と共に時を費すのみ。此

獸苑管理者は、善良なる心情を有し、人生自然を觀察するに聰き人、たゞ讀み書きは一向出來ざりき。バックストンは資性元來人に優れ居れども、之を生來のまゝに放任し去りて修養、訓練、發達を缺きたり。今や其習慣が善にも惡にも造られ得るの時、誠に人生の危機に立てり。此時此際幸ひにも彼はガーネー家と相交るに至りたり。此家の人々は、其美しき社交的性質、其智的敎養及び其公心、博愛を以て名高きなり。此ガーネー家との交際が、自己の心に色彩を加へたりとは、バックストンの後年言ふを常とせし所なり。彼等は彼の自修の努力を勵ましたり。彼がダブリンの大學に入學して、其處に高名を博せし時、『我得し褒賞は彼等ガーネー家の人々の余を勵ましくれし結果なれば、余は此褒賞を彼等に持ち行かんとの志織なり』と曰へり。

彼はガーネー家の一女を娶りて其叔父なる倫敦の釀酒屋の書記として其生涯に出立しぬ。彼が意志の力は、小兒の時、人々の持てあます所なりしが、今は彼の人格の脊骨となり、彼をして其企つる所に於て最も不屈不撓ならしめたり。彼は其全力を擧げて仕事の上に注ぎぬ。而して此大巨人(世人は彼

を『象(エレファント)バックストン』と呼びぬ、彼は身の丈け六呎四吋ありければなり)は最も精力あり最も實行的なる人の一人となれり。彼は言ひぬ『余は一時間釀酒に從事し、――次に數學を學び、――次に射獵す、――而して是等皆全精神をこめてなす』と。彼の爲す所には必ずや不撓の精力と決斷とあり。組合人となるを得て、彼は事業の實際的指揮者となりぬ。彼の爲せし所の尨大なる事業は、其各織維を通じて彼の感化力を感じぬ。而して前の成功よりも遙に多く榮えぬ。彼は其心に種蒔かずして之を放任するを好まず、其夕は之を熱心なる自修のために用ひ、ブラックストン(譯者註、十八世紀英の民法學者)モンテスキュー(譯者註、十八世紀佛の革命的文士)の著及び英國法律の乾燥なる註解を讀破し、消化することを勉めたり。彼の讀書に關する格言に曰く『書を讀み始めなば、必ず之を讀み終るべし。』『書は之を消化し終るにあらずんば之を終へりと思ふ勿れ。』『物を學ぶには何事にても全心を以てすべし』と。

齡僅に三十二にしてバックストン、國會に入る。而して此『世界の第一等紳士の集會』(譯者註、國會のこと)に入りたる誠實、熱心、善良なる人は、誰人にて

奴隷の廢止

も確に獲る顯地を直に得たり。彼が其全身を委ねたる重もなる問題は英國殖民地に於ける奴隷の全解放なり。彼は彼が夙に此問題に趣味を抱きしは、アールハム家の人プリシラ・ガーネーの感化に由ると言ふを常とせり。――此人はいみじき智力と暖き心情とを有し、諸種の美德に富める婦人なりきと。千八百二十一年、此婦人死の床に在るとき屢々バックストンを招きて『奴隷の問題をバックストンが一生の大目的となさんこと』を勸めたり。彼女は其最期の際に此神聖なる委託を繰返さんとせしが、能はず、之を最終の此世に於ける行として息絶えたり。バックストンは決して彼女の忠言を忘れざりき。彼は其娘の一人に彼女と等しき名をつけてプリシラと呼べり。而して千八百三十四年八月一日、――まことに是れ黑奴解放の日――此プリシラが家を去りて他に嫁せんとするとき、父への務より解放せられて夫と伴ひて父の家を去りし後、バックストンは椅子に坐して一友に次の如く書き贈りぬ『花嫁は今去りぬ、萬事は好結果に過ぎ去りたり、而して英國殖民地今や一の奴隷なし』と。

バックストンは天才にはあらず、――偉大なる智的指導者にも智的發見者にもあらず、されど重もに熱烈、直往決意、强精の人なりげにや、彼の全人格は彼れ自らいひし言語に於て最も强くあらはされたり。此語や苟も青年たるものは皆拳々服膺して可なり。曰く『人の間の大相違、弱者と强者との大相違、偉人と小人との大相違は、精力のみ、――不屈の決意のみ、――目的一たび確立せば、後は死か勝利かの二あるのみ。余は齢長ずるに及び、益々此事の正確なるを感ず』と。此性能を以てせば、凡そ此世にて爲し得らるゝことは何事をも爲すべし、而して之なかりせば才能も境遇も機會も決して兩脚の動物を一個の人間とはせざるべし』と。